

理学療法士の展望と理学療法機器の変遷

レッドコード社 Asmund Boe
 フィジオセンター 田舎中真由美
 有限会社セラ・ラボ 山口 光圀
 株式会社ジェネラス 小山 樹

理学療法における治療方法の一つとして理学療法機器は大きな役割を担っており、理学療法士の皆様の技術と知識によって機器の性能が発揮されてまいりました。

そう考えると、理学療法機器と理学療法士の皆様とは切り離す事が出来ない関係であり、両者はともに疾病に侵された患者さんや、障害を持った人々に対して、より良い治療をするために切磋琢磨してきた同志と言っても過言ではない気がします。

そして現在、理学療法士の皆様は、それに予防と言う概念が加わり、さらに多くの日本国民の皆さんのお役にたてる機会を得ている事と思います。

また、理学療法士の皆様の知識の向上により、より高度な研究や治療法が開発されてまいりました。それに伴い理学療法機器に分類されるか否かは別にして、治療のみではなくその治療の効果や効能を、より科学的に証明するための評価機器としての役割も担わなければならないようになりました。現在コンピューターの発達に比

例するように最先端の評価機器で、且つ最先端の治療も担う機器が開発されております。

今回、旧型の理学療法機器から世界最先端の理学療法機器をご紹介したいと考えております。

また日本理学療法学会50周年と言う事ですが、発足当時、理学療法士の皆様は病院等の医療機関に勤務されている方が90%以上だったと思います。しかし50年たった今、理学療法士の皆様の活躍の場所は徐々にではありますが拡大しております。

時代の要請とともに今後はより一層の職域拡大が必須である中、企業の中で活躍する理学療法士、起業した理学療法士、またノルウェー王国から企業で経営に携わる理学療法士、の皆さんにお集まりいただき、それぞれの生きがいや、苦労話をお聞かせいただき、今後の理学療法士の職域の拡大の可能性や求められる企業人としての理学療法士像を語っていただきます。

ヤングインパクトプレゼンテーション1

1 人工膝関節置換術適用患者におけるバリエーション発生を判別する臨床予測式の抽出

—多施設共同研究による取り組み—

常葉大学 保健医療学部 理学療法学科 天野 徹哉

診療報酬の改定により、対象者の特性を考慮した最適かつ効果的な理学療法介入が求められている。しかしながら、我が国の理学療法では、担当理学療法士の経験則による主観的な介入が実施されていることが多く、治療効果や運動機能障害の予後予測に関する客観的な情報が少ないため、対象者や社会にとっては理学療法士の専門性が不透明になっている。対象者や社会に対して理学療法士の存在意義を明確に示し、診療報酬の適正配分に繋げるためには、担当理学療法士の知識と経験に基づく主観的な臨床推論をできる限り可視化して、理学療法士による臨床推論の妥当性を示す必要がある。具体的には、理学療法検査の標準値を設定し、対象者の測定値と照合することによって、ある介入において効果が期待できない症例を事前に判別し、異なる介入手段を検討する必要がある。

我々は、科学的根拠に基づいた治療法の選択と運動機能障害の予後予測を実践するための1手法として、「理学療法診断」を提案

する。理学療法診断とは、対象者の身体・運動機能における異常な状態を把握し、理学療法介入における有用な情報を得るためのプロセスであり、臨床予測式(Clinical Prediction Rule: CPR)を用いた定量的な予後予測により介入手段を選択することができるため、臨床推論の妥当性を可視化することができる。さらに、我々の研究グループでは、「理学療法診断学教室」というホームページを作成し、全国の臨床現場に勤務する理学療法士から多施設共同研究への参加を募集している。多施設共同研究により、様々な要因によって層別化された信頼性のある大規模データを提示することができれば、対象者や社会への明快な情報のひとつになるため、理学療法の透明性の改善と診療報酬の適正配分に繋がると考える。

本発表では、理学療法診断に基づく臨床推論の概要を説明し、我々が現在取り組んでいる人工膝関節置換術適用患者を対象とした多施設共同研究について紹介する。